

(3) 学部・学科の理念・目的・教育目標

本学の理念・目的とそれに伴う人材養成等の目的の適切性については、1 大学・学部等の理念・目的等の使命・目的・教育目標(2)大学の理念・目的等で述べたとおりであるが、このような本学の理念・目的に立脚し、各学部、学科における理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的に係る特色・特徴は、以下のとおりである。

<p>【学芸学部】</p>
<p>理念</p> <p>本学が、リベラル・アーツ教育すなわち幅広い教養を身につけた上で、自らの専門とする分野を研究することを教育理念としていることは既に繰り返し述べられているが、そのリベラル・アーツを「学芸」と翻訳し、学部名に用いた本学部は、その理念をより明確に掲げている。</p> <p>これは、かつては「心の働き或いは心の働きからでる世の中の種々の理学を研究する学問」を行う大学・学部においては、本来目指すべきところであったし、特に言挙げするまでもない。しかし、現実の社会において、高度に専門化された知識や技能を要求される職場で活躍しようとする者に対して、幅広い知識と豊かな教養の涵養のみを強調することは現実に適しないものであり、学問の世界で活躍しようとする者においても、研究の高度化細分化にともない、自らの研究の位置づけを正しく測ることも容易ではないような現状のなかでは、現実的ではない。</p> <p>そのような現実にも応えることのできるように、学芸学部は、漸次カリキュラムに変更を加える一方、2004年度には情報メディア学科を新設し、2007年度には国際教養学科を新設する。これによって、リベラル・アーツ教育の一層の発展を目指す。</p>
<p>目的</p> <p>前述の理念のもとに、学芸学部に所属する各学科は、それぞれ次のような教育目的を持つ。</p> <p>英語英文学科は、英語そのもの、また英語で表現されたものから英米社会の論理・思想などを学び、さらに英語を手段にして我が国と外国との円滑な関係を構築する能力を有する人材を育成することを目的とする。</p> <p>日本語日本文学科は、日本語そのもの、また日本語によって表現されたものから日本固有の論理・思想などの特色を学び、さらにそれを外国に正しく発信できる人材を育成することを目的とする。</p> <p>音楽学科の目的は、音楽を手段として、広く文化・芸術のナビゲーターとして国内外の貢献できる人材を育成することである。</p> <p>そして、情報メディア学科は、これまでに蓄積された教育研究の成果と、文化創造・伝達のツールとして発展しつつあるメディアとを結びつけ、社会的に有用な情報技術と文化知識ならびにコンテンツの開発制作を中心とする教育研究を行うことを目的とする。</p>
<p>教育目標</p> <p>特に、人文系の教育・学問の世界においては、優れた教育者また研究者は人間に対する深い</p>

洞察力を持つ。この洞察力は、より広い分野における知識を学ぶことによって、おのずから涵養される面が多い。リベラル・アーツ教育の主眼はここにあるのであり、したがって、これを教育目標としている。

学芸学部に属する4学科はいずれも、各自の研究をより充実させるためにも、それぞれの学科の目的を追求するとともに、カリキュラムなどにおいて相互に協力しながら、できるだけ幅広い分野の学問を履修させて、幅広い教養をつけるようにしている。

【学芸学部 英語英文学科】

理念

英語英文学科は、本学の理念を実現するために、次のことを理念とする。

英語を単なる技術として習得させるのではなく、英語を通じて英米の精神文化の真髄を学び、本学の3つの建学精神、他者のために生きるためのキリスト教主義の人格教育、人類の共生を主眼とした国際主義、豊かな人間性を育むリベラル・アーツの精神、これら3つの建学精神に、英語英文学という分野を用いて寄与していくこと。

目的

英語英文学科の教育の目的は、上記教育理念を土台に据え、英語を手段にして社会（国内・国外）や時代（過去・現在・未来）に常に目を向け、主体的に他者や社会と関わり貢献しうる能力を有する女性を育成することである。英語英文学科の主要科目『Shakespeare Production』をはじめとする英米文学、英米文化、言語研究、コミュニケーション研究の学びを通して、学生達に深い思考力・応用能力を身につけてもらう。

教育目標

英語英文学科では、英語運用能力を専門教育の土台石にして、文学、文化、言語、コミュニケーションという4つの専門教育分野を開講している。「読む、書く、話す、聴く」の4技能を基礎にして、4つの専門分野の基礎から応用・研究に学生を導くようにカリキュラムを組んでいる。

こうした英語の学びによる英語英文学科の教育目標は、精神面での自信と自己の確立を養成し、専門性を多様に応用できる潜在能力を有する人物の育成である。将来の具体的な方向として、在学中および卒業後の留学、卒業後の大学院進学（国内・海外）、教職（英語）、一般企業等、各方面に対応し活躍しうる人物の育成を目標とする。

【学芸学部 日本語日本文学科】

理念

本学の理念を真の国際的相互交流の側面から具現化するために日本文化を根源的に研究し、その成果を主体的に世界に向かって紹介・説明しうる人材の育成を目指す。

目的

上代から現代までの文学作品を研究・教育の対象とすることで、日本文化に横たわる思想・

日本人の価値観ならびにそれらが現象として表われたものとしての風俗・習慣の理解を目指す。

一方、こうした日本人の営みを言語の面から分析することによって、日本文化の特質を捉えなおす。さらに、こうした成果をもとに日本と日本人を外国人に紹介・説明する術としての日本語教授法を研究・教育する。

教育目標

日本文学の領域においては、上代から現代までの文芸作品・作家・それらが置かれた時代背景を通時的・共時的に幅広く理解した上で、学生の興味・関心に応じて特定の対象のより深い研究を支援することを目標とする。

また、日本語学の領域においては、言語現象を対象に同様の手法で分析し学生の研究を支援することを目標とする。

さらに、日本語教授法の領域では、日本語指導内容と指導方法の基本的知識を得た上で、具体的に外国人学習者を想定しそうした学習者が望むことがらを望む形で与えられるよう、より実践的な教育方法の会得を支援する。

【学芸学部 音楽学科】

理念

音楽学科では、広範な知識・教養を持つことを理想とし、女子大学全体の建学の精神及び理念であるキリスト教主義教育、国際主義教育、リベラル・アーツ教育の3支柱を基とし、21世紀社会において「世界的視野で主体的に考え行動し、国際社会に貢献できる女性の育成」を重んじている。そして、西洋芸術音楽を深く理解するのみならず、グローバル化の流れに先駆け汎く世界のすべての音楽を視野にいれて学ぶことを通し、多様な現代社会に対応可能な教養と専門知識を体得させ、感性あふれる人間として成長させる教育を行うことを基本理念とする。

目的

上記理念に基づき、バランスの取れた思考・発表・諸種の価値を判断識別する能力と研ぎ澄まされた国際感覚を身につけた音楽のみならず、一般社会において文化、芸術のナビゲーターとして貢献できる人材を育成することを目的とする。

教育目標

音楽学科に設置されている演奏専攻と音楽文化専攻は、それぞれ特性を持ったカリキュラム編成となっている。すなわち、両専攻の学生が相互に共通した科目を履修し、双方の専門知識を共有しながら学び、どちらかに極端に偏重することなくバランスの取れた教育成果を得られるものとなっている。

演奏専攻では、すでに存在している音楽作品の演奏による再現行為を通して、音楽文化専攻では創作および研究といった音楽行動を通して、音楽の持つ真の力を、一般社会や音楽の専門家の人々に発信してゆくことを目標とする。

【学芸学部 情報メディア学科】

理念

情報メディア学科の理念は、本学の理念の基盤上に立脚し、学芸学部が蓄積してきた人文科学(芸術系をふくむ)、社会科学、自然科学系の教育研究の成果を融合させつつ、情報化・国際化の時代に対応したリベラル・アーツ教育を行うことである。

急速に IT 化が進む現代社会で真に求められているのは、単なる技術ではなく、豊かな教養と深い人間性に支えられた発想を表現できる技術である。本学科では幅広い知識とメディアを活用できる技術を身につけ、主体性を持って社会に関わり、理想的な社会を実現するために習得した技術を駆使できる人材の養成を目指す。

目的

情報メディア学科は、この理念を実現するために、学芸学部で伝統的に築かれた知的財産、すなわち多様で豊富な教育研究の諸成果と、文化創造・伝達のツールとして発展しつつあるメディアとを結びつけ、社会的に有用な情報技術と文化知識ならびにコンテンツの開発制作を中心とする教育研究を行うことを目標としている。この教育研究の過程に学生が関わることによって、学生が有する能力の効果的な開発が可能になる。

教育目標

情報メディア学科では、情報メディアを手がかりとして、学生が自らの適性および能力を総合的に開発し、国際化する情報社会において積極的に貢献する女性を育成することを目標とする。

【現代社会学部】

理念

現代社会学部は、2000年4月に1学部1学科体制として社会システム学科をスタートさせた。当初より、女性の社会進出や男女共同参画社会の実現という社会背景のもと、社会に出て活躍する女性を育成するための実践的な社会科学教育を行うという目的を抱いて誕生した学部である。

現代日本社会の趨勢を観察したとき、現代社会学部のような社会科学分野での教育と研究は、現代女性の社会的視野を広め優れた労働力を陶冶していく上で、特段かつ固有の役割がある。すなわち、社会システム学科のように、法律系科目を卒業に必要な要件として6単位修得させ、選択したコースを中心に専門科目である44単位の応用・各論科目を修得し、あわせて情報処理能力育成としてコンピュータ活用を修得させることは、どのような職業を選択したとしても、実業界が求めている人材要求に対応できうる教育体制である、と言える。また、CASE(英語特別プログラム)は、単なる会話能力を育成することが目的ではなく、5つのコースの専門内容に合致した英語運用能力をネイティブ教員のもとで培うことを目的にしている。

現代こども学科も、このような学部理念と教育目標を同一にしており、わけても小学校教員としての優れた資質の形成を主たる目標にして教育体制が作られている。小学校教師として必要な教科指導能力を育成することはもちろんのこと、教育現場で今日求められているところのいじめ

や不登校などの諸問題に実践的に立ち向かうことのできる、多面的な教師力の育成を目的にしている。また、現代こども学科の特徴の2番目は、こども学関連科目の履修を通じて、現代こどもの社会的環境を総合的に理解把握できる能力を培うことで、卒業後の進路を小学校教員以外に求めた学生に多様な可能性を保障していることである。

こどもをめぐる社会的市場は、その潜在的需要の大きさから、新規参入分野や隙間産業も含めて、基本的には市場が拡大する傾向にある。これら新しいこども関連分野への女性進出は、これからの21世紀社会を形作っていく潮流の一つになるだろうと思われる。

目的

上述のような日本社会の現状にあって現代社会学部の目的は、社会の各方面で主体的に判断し活躍できる女性を育成していくことである。このことは職業婦人の育成に限定されず、また特定のライフステージに限定されないような、現代社会を生き抜く力の形成を目的にしている。

そのための設定が、社会システム学科にあっては法律・情報・英語運用能力の一体的発展である。また、現代こども学科の目標は、小学校教員として必要な教師力の形成を共通する素地にしなが、こども関連の各分野でパイオニア的に活躍できる人材の育成である。

教育目標

両学科に共通する学部としての教育目標は、社会科学的な知見から現代社会の問題点を感知でき、これらの諸問題の是正方向を女性の視点から主体的に考察・提言できる諸能力の育成である。そのために必要な社会の各場面を対象とした分析科学をカリキュラム上でも保障している。

【現代社会学部 社会システム学科】

理念

社会システム学科における「社会システム」という名称も社会を単に現象面で捉えるのではなく、実際に機能し、日に日に変化していく総合体として捉える意図のもとに採用された名称である。具体的には国際社会や日本における社会的諸制度、組織、人間関係など人間の諸活動に伴い形成される仕組みを社会システムと捉えているのである。

とりわけ、男性と女性との真に平等な社会関係から成り立つであろう21世紀型の社会の在り方を探求するところに、現代社会学部が目指す眼目がある。現代女性の社会進出は、押しとどめることができない趨勢として、今後も持続していくであろう。家庭・職場・地域などで現代女性に期待される役割の増大を基本的な動向として認識し、それらの場で自らの諸能力の開発と自己実現ひいては社会貢献を遂行していけるような主体形成を、キャリアデザインという観点を組み込みながら教育研究していくことが現代社会学部の当面する課題である。

このようなコンセプトのもと、学生は学内外の実務経験者の講演、自らのフィールドワーク、インターンシップなどを通して、社会システムに自ら参画するという経験を通して実社会に出るための力を養うことが本学科の基本的理念である。

目的

社会システム学科の目的は、21世紀の現代社会の産業界を初めとする各場面で必要とされる人

材を育成することである。とりわけ、これまで社会システム学科の卒業生は、金融界を初めあらゆる産業場面に進出していったが、引き続き家庭・職場・地域などで現代女性に期待される役割の増大を基本的な動向として認識し、それらの場で自らの諸能力の開発と自己実現ひいては社会貢献を遂行していけるような主体形成を目指している。

教育目標

社会システム学科では、どのような産業場面やライフステージにあっても必要となるであろう法律・情報処理・英語運用能力の一体的発展に重きをおいている。法律系科目の6単位必修化、実践的なコンピュータ活用、CASE(英語特別プログラム)などがその体现である。

これらを通じて、社会の各方面で主体的に活躍できる人材の養成を教育目標にしている。

【現代社会学部 現代こども学科】

理念

少子化・高齢化を否定的に論議するのではなく、少子化の現れを少なくなったこどもに対する教育や福祉の重点的対象化への積極的契機と捉え、こどもの健全育成と全人格的発展に向けた社会環境の整備に貢献しうる人材育成を学科の理念・目標としている。

また、こどもに関係する潜在的需要に対応した商品市場規模は年々増大傾向にあり、小学校教員志望でない学生についても、これらこども関連産業に進出していけるよう、こども存在の基本的理解が得られるようなカリキュラム構成に努めている。

目的

少子化社会にあっても、こどもという存在は、人間社会の発展的基盤である。こどもという存在に対する社会科学的な知見を深め、こどもを取り巻く社会環境の整備に貢献できる人材育成が目的である。教育界だけでなく、こどもを取り巻く福祉・情報・各種サービスなどの潜在的ニーズを顕在化し、公共的あるいは商品的にこれらのニーズにサプライできる社会環境づくりに貢献できる人材育成を目指している。

教育目標

現代こども学科の教育目標は、小学校教員として必要な教師力の形成を共通する素地にしながら、こども関連の各分野でパイオニア的に活躍できる人材の育成である。こどもが生きる生活場面である家族・学校・地域などにおいて子どもたちは何を求めているのか？そして大人たちはこれらのニーズに如何に対応すべきなのかを社会科学の見地から研究教育し、こどもを巡る広範なニーズに対応できる人材育成が教育目標である。

【薬学部】

理念

わが国の薬学は、有機化学を主体とする創薬科学を柱として発展してきた経緯をもつ。これは古くから薬剤師養成を念頭にしてきた欧米の薬学とは際立って異なる点である。明治維新後、欧米列強に対抗できる国力を醸成するため産業構造の近代化が急がれたが、製薬産業の興隆も

その一例である。今日の日本の製薬業界の医薬品開発における世界に冠たる実績の背景には、わが国の高度な薬学の研究水準があったことは論を待たない。

しかしその一方で、薬学のアイデンティティである薬剤師養成は傍流として扱われ、長らく臨床教育は軽視され続けてきた。その背景には、わが国社会の医療制度に欧米のような医薬分業が長らく根づかず、薬剤師の存在感がいたって希薄であった点も挙げられよう。

しかし、高齢化が進み、医療保険制度の存続が危ぶまれ始めたことや、薬害問題や医療ミスが多発をみる昨今、医薬分業の機運の高まりとともに、医療の担い手として、あるいはリスクマネジメントの観点からも、薬剤師本来の職能を見直そうとする動きが、近年急速に進展し始めた。

医療現場が、このような変革期を迎えつつあるなか、教育面でも遅ればせながら薬剤師職能の向上を目指すべく、従来の創薬科学偏重主義を改め、臨床薬学教育を重視する路線へシフトすることになった。薬剤師養成教育の6年制課程への歴史的変革である。

旧来の経験のみに基づく画一的な薬物療法を見直し、科学的根拠に基づいて患者個々に最適な処方を提供しようとする動き、すなわち「根拠に基づいた医療 (Evidence Based Medicine, EBM)」あるいは「テーラーメイド医療」の実践が重要視されるようになった近年の医療現場にあって、薬剤師は薬学という体系化された専門的学識を背景にして、「医薬品の適正使用の推進」という面で科学的に薬物療法を吟味し、その有効性と安全性を保障することが本来発揮すべき職能の本質として意識し実践することが求められており、そのためには臨床薬学領域の科学者として理念と問題解決能力、すなわち研究者としての素養を薬剤師は備えている必要がある。

以上に述べてきたような、薬学教育におけるわが国の歴史的経緯と近年の社会的要請に鑑み、本学薬学部は崇高な倫理観や豊かな人間性および国際感覚の醸成はもとより、基礎薬学と臨床薬学のバランスある教育のもとに高度な専門知識とこれに裏づけられた問題解決能力を備えた科学者としての薬剤師養成を念頭におく。また、このことはおのずから、先進的な学術研究の担い手として創薬科学、環境科学、社会薬学などの幅広い分野に貢献できる人材の育成にもつながるものである。

目的

薬学部は、高い専門性を有しつつも、本学の理念を基盤として人間尊重・生命尊重を最優先に考え、21世紀の社会から期待されつつ活躍できる女性薬剤師ならびに創薬科学者の育成を目指すものである。

意欲ある優秀な医療人および薬学界で活躍できる人材を養成することで、女性の社会での活躍を支援していきたいと考えている。

教育目標

有能な薬剤師の要件には、問題解決能力を保持していることがあげられる。この能力の育成には、薬学の基礎ならびに臨床の全ての領域にまたがる優れた洞察力ならびに研究能力を磨かせる必要がある。

したがって、第一義的教育目標は薬剤師の育成ではあるが、おのずから創薬科学分野をはじめとする幅広い研究領域で活躍できる人材の育成を念頭にしている。

【薬学部 医療薬学科】

理念

近年の医療技術の驚異的な進歩、医薬分業の進展、新規医薬品の開発、高齢化社会の進展などに伴い、薬剤師の果す役割は高度化、複雑化、多様化するとともに、ますます重要になってきている。それに呼応して薬学教育における教育研究内容の見直しが進められ、医療人としての質の高い薬剤師養成に対する強い期待が、社会全体からこれまで以上に強く求められている。

医療薬学科は、このような社会的要請に応え、医療現場において医師、看護師、臨床検査技師、管理栄養士とともにチーム医療の一翼を担い、真に質の高い有能な薬剤師を主として養成するために開設したものである。

目的

有能な薬剤師の要件には、問題解決能力を保持していることがあげられる。この能力の育成には、薬学の基礎ならびに病床の全ての領域にまたがる優れた洞察力ならびに研究能力をみがかせる必要がある。

したがって、医療薬学科として第一義的には薬剤師の育成を目標にかかげてはいるものの、自ら創薬科学分野をはじめとする幅広い研究領域で活躍できる人材の育成をも視野に入れている。

教育目標

医療人として、また創薬に関わる研究者として社会で活躍するためには、広い領域にわたる医薬品に関する高度な専門知識を有するのみならず、病める人への思いやりやその心理に対する深い洞察力を持つことが必要となる。

本学は、建学の精神としてキリスト教による人間への愛を教育の基本とするリベラル・アーツ教育を掲げて出発した大学であり、高度な専門知識を磨くとともに、倫理観、使命感を持ち、幅広く精深な教養を有する豊かな人間性をもった人材の養成には恵まれた環境が整っている。宗教・人文科学・芸術系の学問にも接して、その人間性を養うとともに、社会科学系の学部の学問、特に心理学系や社会福祉系の学問にも接することで、単科大学では難しい学際的な幅広い見識を薬学の専門知識に加味することができる。

また、薬剤師の卒後教育や研究支援を通して再教育機関として地域社会に貢献していくとともに、薬学、健康、衛生に関する生涯学習講座などを充実させ、地域住民の健康衛生増進にも寄与していきたいと考えている。

【生活科学部】

理念

生活科学部は、人間生活学科と食物栄養科学の2学科からなり、さらに食物栄養科学には、食物科学専攻と管理栄養士専攻が設置されている。生活科学部の理念は、本学の理念を具現化するため、広く生活科学の見地から自然・社会・人文の諸科学を基盤として実践的総合的

に教育研究を行うことである。

目的

生活科学部の目的は、本学の理念を踏まえた上で、あらゆる生活場面およびその背景を科学的な分析の対象とし、その基礎理論と応用技術の教育研究に重点をおき、それらを社会的な場において有効に活用できる指導的人材を養成し、併せて学部教育研究活動をもって、社会的に貢献することである。

教育目標

生活科学部では、主に社会・人文科学的な手法での教育研究を人間生活学科で、自然科学的な手法での教育研究を食物栄養科学科で行い、それぞれの学科の専門分野に立って社会貢献できる人材を育成することを教育目標とする。

【生活科学部 人間生活学科】

理念

人間生活学科の理念は、生活環境との関連で、家族・家庭生活を中心とする人間生活を主要な教育・研究の対象とし、自然科学・社会科学・人文科学の方法を駆使して、多角的、総合的、実践的に研究・教育を行うことである。

目的

人間生活学科は、上記の教育・研究を通して、真に豊かで幸せな家庭生活・人間生活の確立および人類の福祉の向上を目指す。

教育目標

人間生活学科では、生活をめぐる自然・社会・人間・文化に対する科学的な認識力と実践能力を有した生活者であるとともに、企業・行政・団体・学校などで生活のスペシャリストや家庭科教員として活躍できる人材の養成を教育目標とする。

この教育目標は、生活科学部の理念・目的に基づき、さらに、学問的性格と、学士修了者に求められる教育研究に配慮して立てられており、本学科において養成しようとする人材に適合する。

【生活科学部 食物栄養科学科】

理念

食物栄養科学科は、本学の理念を具現化するため、主に自然科学的手法から食と栄養における実践的総合的な教育研究を行うことを理念とする。

目的

食物栄養科学科の目的は、本学の理念を踏まえた上で、食と栄養に関わる教育研究を行い、幅広い教養と科学的思考力を身につけた人材を育成することである。

教育目標

食物栄養科学科のうち、食物科学専攻では個々の食生活からそれをとりまく食環境にいたる

までを視野に入れ、実験・実習を通して得た科学的な思考力と技術をもって企業・学校などで活躍する人材の育成を教育目標とする。

また、管理栄養士専攻では生きていく上での人間の食生活を総合的かつ有機的に関連づけて学び、科学的に分析、理解し、病院・学校・企業などで適切な栄養アセスメント・指導・マネジメントができる管理栄養士の養成を教育目標とする。

大学・学部等の理念・目的・教育目標等の周知の方法とその有効性（A群）

本学の理念・目的・教育目標等は、ホームページや刊行物[添付資料(2)]によって、教職員、受験生、学生、学生の父母、卒業生を含む社会一般の人々に対して広く周知している。

学生に対しては、入学式、新入生オリエンテーション、カリキュラムにおける「共通学芸科目」「キリスト教関係科目」、毎日の礼拝やリトリート、キャンプなどの課外活動、協定大学留学など本学のさまざまな教育研究活動の中で、折に触れ学生は本学の建学の精神・理念について学ぶことができるように取り組んでいる。各学科では、学外オリエンテーションやアドバイザークラス、基礎演習などを通しての周知にも取り組んでいる。

また、年2回開催する父母と大学側役職者との懇談会、学科別懇談会および年2~3回都道府県の異なる会場で開催する地区別懇談会では、本学の現況や学部・学科の状況を紹介する中で、本学の教育方針に対する父母および卒業生の理解を得よう努力している。

このような本学の取り組みは、ホームページや刊行物による周知と相まって、特に学生、学生の父母に対して有効な方法であると評価している。

一方、本学が個性・特色をより明確化していくためには、教職員が大学・学部等の理念・目的・教育目標等を共有できるような周知の方法が必要であり、現在は、原則として毎年実施している自己点検・評価の取り組みが、そのような役割を担っている。その際、大学・学部等の理念・目的・教育目標は、本学の計画、取り組みを評価する上での重要な指標となっていることから、周知方法の有効性は高いと考えている。

しかし、本学の理念・目的・教育目標について、常に教職員が深く学ぶことや周知方法の有効性についての検証のシステムを構築することが今後の課題である。

本学の建学の精神および基本理念を内外に周知し、理解を図るために、2006年度には本学のブランド構築について検討するワーキンググループを立ち上げ、検討を始めたところである。